

## 佐久の先人たち④

### ハワイ日本人移民団に尽した政治家

おか べ じ ろう  
**岡部次郎**

(1864~1925年)



若き日、ヒューマニズムに燃えてキリスト教会の牧師としてハワイに渡り、日本人移民団を守るために力を尽した。後半生は、郷里に戻り、衆議院議員となり、閥族打破、憲政擁護を求めて奔走した。

### ●夢の米國留学を実現

岡部次郎は、一八六四(元治元)年、岡部弥門・ひさの次男として、佐久郡春日村(現佐久市春日)に生まれた。小学校時代、利発で活発な子だったが、子ども十人を儲けた岡部家の家計は苦しく、中学進学への希望は実現できなかった。

しかし向学心に燃えていた次郎は、一五歳のとき元上田藩士恒川重遠の塾に入って漢字・漢詩を学び、小諸教会の真木牧師から英語と漢字の教授を受けた。

### ●ハワイ日本人移民団の地位向上を求めて

各国からの移民が増えるとともに、政治に暗雲が漂い、人々の心情は不安に満ちていた。ハワイ王国憲法で一度は認められた日本人参政権も、一八八七(明治20)年の憲法改正で失われてしまった。一八九三年、アメリカからの移住者を中心にして独自の市民軍を持った改革党を組織し、ハワイ臨時政府を設立し、米国の合併推進を図った。

次郎は、この機会に日本人移民の地位向上を求め、日本人同盟会を組織し、会長に就任した。同盟会は日本人参政権を求めて運動し、全委員連署で、外務大臣井上馨と自由党総裁板垣退助に建白書を送り、次郎は王朝派に加担しないよう、各地の移民団を説いて回った。その後の運動は日を迫ることに新しい政治実現への世論が高まり、王国政府は倒れ、ハワイ共和国が誕生した。一八九八年にはハワイ共和国はアメリカの保護領となった。

この運動の中で、次郎はハワイ新聞の主筆になり、次第に伝道活動から執筆や政治、経済に深い関心を持つようになった。

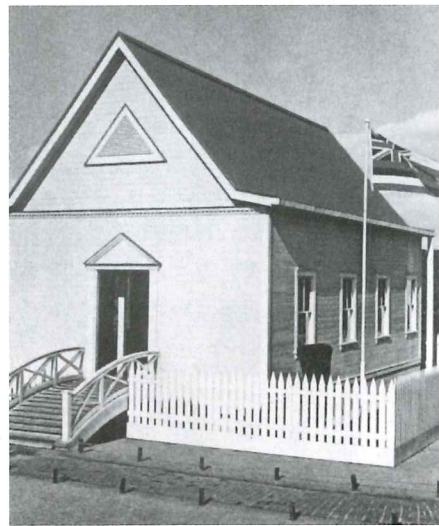
一八九五(明治28)年、ハワイで活動した七年間の牧師生活に別れを告げ、シカゴ大学に留学することになった。このとき次郎は二八歳。シカゴ大学には哲学や教育心理学で有名なジョン・デューイが教鞭を執っていたが、この教授の邸宅で二ヶ月間、次

一八八三(明治16)年、一八歳になってさらに高い学問を求めて上京し、東京では有名だった中村正直(敬宇)の私塾「同人社」に入学し、英語を学び、欧米の学問に触れ、米國留学を夢見るようになった。

留学する決心はしたものの、生活に追われていた次郎には渡航費もなかった。さいわい同人社などの協力で、一八八五(明治18)年に渡航できることになった。同じ船の客に、特許局の局長であった高橋是清(後の内閣総理大臣)がいた。長い航海の中で、次郎は高橋と接する機会を得、これが縁で渡航の旅は高橋に同行する形となった。オーランドでミックス・バンダゴー私立学校に通い、その後カリフォルニアのボウエンス学園を卒業し、オーランド第一組合教会で洗礼を受けた。

### ●牧師となってハワイへ

ハワイには、古くからそこに暮らす人々(ファーストネイション)が居たが、一八世紀に英国船が寄港して以来、多くのイギリス人・アメリカ人が渡来し、とくにアメリカの農園経営者が耕地を獲得して砂糖キビ栽培を始めた。こ



次郎がハワイに建てた教会。  
今は愛知県の博物館明台村に移築されている。

の農園の労働者として、多くの日本人が渡航し、日本人社会は三万人に近い人口になった。彼らはハワイ砂糖キビ産業に大きく貢献したが、激しく過酷な労働を強いられ、日常生活は悲惨な状況で、暮らしも荒れていた。

このような日本人移民社会を救済しようと、オーランドの教会に派遣の依頼があり、一八八九(明治22)年、次郎はハワイ島ヒロに牧師として着任した。次郎はヒロの伝道所を中心に、散在する日本人移民のキャンプを訪問し、多くの貧しい移民に会い、英語を教え、聖書を語り、経済的援助もした。当時基督教新聞に載った次郎の書簡には「愚と貧は時々諸悪の父母と化身候事珍しからぬことに候。…小生の働きは伝道・教育・慈善の三部に分ち、教会の外に学校あり信徒共済会あり、学校は知識の開発を図り、共済会は慈善救助の事を司り、整然運動いたし候…」とある。

一八九〇年、日本人キリスト教会をヒロに建設した。ハワイアン・ボードの牧師たちは、次郎が二年足らずで教会を設立した快挙に驚いた。この教会は一九六五(昭和40)年に解体、日本に輸送され、現在は愛知県犬山市の明治村に海外移民史をものがたる重要建築物として保存されている。

郎は寝食を共にしたのである。大学ではデューイから倫理論理学・倫理・心理学・政治倫理を学んだ。その後ロンドンに渡ってヨーロッパ各地を回った。

### ●議員となって護憲運動を推進

一八九九(明治32)年、次郎は一四年間の海外生活を終えて、祖国の土を踏んだ。立憲政友会総裁伊藤博文の推薦で、「北海タイムス」の主筆に任命され、札幌に居を移したが、次郎は社説論文を書くとき、郷里春日村に思いを馳せ、「鹿部」という筆名を使った。一九〇四年日露戦争が勃発し、従軍を志願し、満州に出征した。

一九二二(明治45)年、政治に関心の強かった次



次郎の選挙応援に来た代議士たち。左から2人目が次郎。4人目が尾崎行雄

郎は郷里に帰り立憲政友会から衆議院総選挙に立候補し当選した。政界は未だ薩長閥が力を持ち、軍も影響を強めていた。世間では「閥族打破、憲政擁護」の運動が高まり、次郎も長

野県下で護憲運動を展開した。政友会が門閥政治に妥協したときには、尾崎行雄らと脱党して政友倶楽部をつくり、やがていくつかが合併して憲政会が生まれ、次郎はここに所属した。一九一七(大正6)年、寺内内閣の下で海軍参政官に任命され、党政務調査会長にも推された。一九二二年、次郎は外務省と協力して国際平和協会を設立し、その専務理事に就いた。この協会の綱領には、「本会は、国際正義と人道の大義に則り」「国際間の妄想偏見を一掃し、東西文化の融和を計り、支那米國其の他の各国と親善輯睦の美を挙げ、世界の平和に貢献し、人類の福祉を増進し、以て日本帝国の使命を全うせんことを期す」とある。

一九二五(大正14)年、病と事故が重なり、次郎はこの世を去った。六一歳であった。若き日々はヒューマニズムに燃えて世界を駆け巡り、大正時代は尾崎行雄らとともに、護憲運動に奔走した生涯であった。

(吉川 徹)

### ○参考文献

中野次郎著『疾走する鹿 信濃の国岡部次郎伝』

一九九三

望月町誌編纂委員会『望月町誌』第五巻 近現代編

望月町誌刊行会 一九九九